

女院御書 下卷

底本
文政三年木版
辨才本

女院御書 下卷

北白河の女院の御尋によりて西山国師の答たまへる条々

(第一章) 西山

観念法門沙汰し候らひし時、念仏につきて五種の利益を註し申べきよし、仰給ひて候らひしかば、かくのごとく申候なり。

念仏と申す事は、人ごとに知たることに候へども、念仏する人はこの世にて仏に守られまいらせ候ゆえに、年をのべ命をのべて、横さまなる難にあはずと申事の候は、横病横死の難にあはざる事なり。しかれば念仏申候人、前世の業病、かぎりありて定まれる所の命、の外にきたる所の難をのぞく。ゆえに念仏といふことをこゝろうれば、五種の増上縁と申して、減罪増上縁とて罪をけす徳あり。

護念増上縁として仏に守らるゝ徳あり。見仏増上縁として臨終に仏を見
たてまつる徳あり。摂生増上縁として仏に摂取せられまいらせ候徳あ
り。証生増上縁として、もろもろの悪人いかなる罪人なりとも、仏の
願力に乗じてかならず往生を^①うるなり。

この五種増上縁といはるゝ方を、念仏の利益とは申侍るなり。故
に仏の御ちからをもて、もろもろの悪業煩惱にさへられずして、罪
悪生死の我等が往生することろを増上縁とは申侍るなり。

故に念仏と申はすなはち南無阿弥陀仏の六字なり。それと申はま
さしく他力往生の行なり。念仏の姿をば觀經には摂取不捨と説あら
はし候なり。その摂取不捨と申は、念仏の行者を仏の光明の中にを
さめとりて捨給はざる義なり。そのゆえは、仏と行者と一つにして
離ざる所を摂取不捨とは申なり。しかれば仏の三業をはなれて行者
の三業もなく、行者の三業をはなれて仏の三業もましまさざるゆえ
なり。かくのごとく仏を念ずる念の中に、阿弥陀仏の覺体まさしく

① うるなり「うる徳あるなり」歟

いりて正覺を取たまへるなり。こゝをもちて彼此三業不相捨離とは申なり。仏と行者とはなれざる姿を南無阿弥陀仏の六字の名号とは申侍るなり。

しかれば念仏の外に五種の増上縁とて別にその姿をつくるべからず。かくのごとく仏にしたしく成ぬれば、横病横死のもろもろの難を自然にのぞくなり。こゝをもちて念仏の人は横さまなる難にあはずとは申なり。しかれば仏をはなれぬゆえに、仏の御ちからにて罪をのぞきて護念をかうむり、また仏の御ちからにて摂取の益にもあづかりぬれば、いかなる悪人といへども往生をとぐるゆえに、五種の増上縁とは申なり。

阿弥陀仏の御姿ををがみ、かやうにこゝろえすましぬれば、かならず摂取の利益をかうむるなり。それと申は、今願力のむくふる所なり。故に、この仏は本願のゆえに十惡五逆の罪人もかならず來迎摂取の益にあづかると信ずる時、本願その心にあらはれて、かの仏

の体を深く信ずるころはげにげにしくおこるなり。

かくのごとく信ずれば、自力の行にては往生はかなふべからず。

仏力難思のゆえに生死ははなるべかりけりとこころうるを至誠心とは申なり。他力本願のゆえに、行者は十声一声南無阿弥陀仏と心うるを深心とは申なり。よろづの諸経論にをしふる所の衆生往生の行は、南無阿弥陀仏の六字を本とし給ひけりとこころうるを、廻向発願心とは申なり。三心既に具しぬればかならず往生すと説事、經文あきらかなるものなり。

本願かくのごとく、いかなる罪人もむかへ給ふと申さばとて、悪くるしからずと思ふ事はゆめゆめ候まじきなり。たゞ仏の方よりいへば、いかなる罪人もすて給はざると申事にてこそ侍れ。

又經に一念十念の他力往生を説ばとて、念仏の数詮なしと思す事おぼゆめゆめあるべからず。たゞかゝる罪おもき我等をもすて給はぬ仏なりとこころうるうへには、常にこころにかけて身のたえんにした

がひてこそ念仏をも申、もうし悪業をまかなしむべき事にてこそ候へ。

この念仏の行においては、かやうの御文などにてはたやすく申ひらきがたく候へば、御不審にしたがひてなほ申べく候。

(第二章) 女院

三心をおこしたる人の念仏こそかならず往生はすれ、さもあらぬ念仏は仏の来迎にあづからずと申人の候はいかゞ候べき。つやつや三心の名をだにも知らぬ身にて候へば、年頃たのみをかけ、よるひる申候ひつる所の念仏は、外道の苦行と泡のやうにむなしくなり候べきにや、心ぼそく覚候へ。

むかし法然上人の御房へ尋申て候ひしかば、三心といふ事は仰られず、本願をふかくたのみて常に念仏すれば、最後にはかならず迎へさせ給ふなり。ゆめゆめ疑ふべからず。又おこたるべからず。かへすがへす、いかゞなど塵ばかりもあやぶみ、うら思ひの心あるべからず、とこそ仰られ候ひしかば、それをふかくたのみてこそ候

へ。これは僻事にて候やらん。よくよく仰候へ。くはしく承べく候。

(第三章) 西山

御文くはしく承り候ひぬ。まことに故上人の御房の仰られ候ひける事こそ、ちかくは善導和尚のをしへ、とほくは釈迦如来の御遺言と、ふかく信じ思食べき事にて候へ。かへすがへす目出度候。御疑ひ候べからず。

それにとりて、三心と申候は、念仏の行者の必具すべき事にて候なり。されば観無量寿経には、三心を具するものはかならず彼国にうまるゝと侍り。善導和尚は、一心も闕ぬれば生るゝ事を得ずと仰られて候へば、かならず具すべしと申候らん人も、また僻事にても候はず。

故上人御房の申されしは、三心とて事の目出度は、その名をだにもしらぬ人なれども信ずれば自然に具するものにて侍るなり。これ

はかの法蔵比丘、五劫まで案じ給ひたりし御巧のふかきが故に、しらぬ人も具する事にてあるとこそ候ひしか。その心にては、只念仏せよとすゝめて、別の三心をば仰られ候はざりけりとこそ覚え候。^①

その故はかの願力をふかくたのめと候ひけるは至誠心なり。かの願力を信じて念仏せよと候ひけるは深心なり。最後にならず仏の来迎にあづかると信ぜよと候ひけるは廻向発願心にて候ひける故に、往生のころざしふかく念仏申さば、自然に三心具足のものにて候。

(第四章) 女院

こまやかに承り候ひぬ。いよいよ頼もしく目出度候。名をだにもしらぬものゝ、おのづから具する三心にて候なれば、我身もそのつらにてや候らんと、いよいよ頼もしくうれしく候。今はいかにも、故上人の御房の御をしへをば疑ふころも、又あらたむる心も候まじと、なほなほ悦びて候。^{そもそも}抑かやうに仰かうむり候ついでに、三心

① 候「候へ」

の名をも、またそのおこりをも、あらあら承り候はゞ、人にをしへなどする程の事こそ候はずとも、常に心につけ、よりより思出し候はんために、こゝろをやしなふたよりと大切に思ひ候なり。いかゞ候べき、さらずとも候ひなんや、御はからひにしたがひ候べく候。

(第五章) 西山

それもやすく候。たゞ詮をとりて申べく候。御心をとめて聞召候べし。

まづ至誠心と申候は、善導和尚の御心によらば、真実の心と仰られて候。これによりて人の申やうは、貪欲・瞋恚をとゞめ、よろずの妄念をやめて、真実にこの世をいとひて、念仏を申すこゝろを、至誠心とはなづく。されば至誠心はいかにもおこしがたき事なり。かゝればいかに念仏すとも往生は叶ふまじきなど申す人の候なり。これはゆゑしき僻事にて候。

まづ、念仏はよろづの行の中にきはめてやすき行とこそ思ひなら

はして候に、真実のこゝろざし有難く、おこしがたき事にて候はんには、またく安き道とは申べからず候。

また、阿弥陀仏の本願をば他力の本願となづけ、念仏の人を他力の行者と申候ぞかし。我心の真実なるを至誠心と申すならば已に自力の発心なり、またく他力の願心にあらず。かの聖道の人は、仏にならんと思ひ侍る心によりて、その心のおこるを、すなはち菩提心とは申なり。この浄土門の行は、他力本願の真実なるによりて、其のち仏に助けられまいらせんと思ふこゝろによりて、今真実の心のおこるによりてすなはち菩提心とはなづけて候やうに、我心は虚仮なれども、真実の本願をあふぎて、かの仏をたのみたてまつるによりて、真実の心の起るとは申候なり。

かやうに頼をかくるゆえに、おのずから心のおこりて、本願の名号をとふれば、発心するにてもあり、又三心にてもあり、又他力

の行にてもあり、又これこそはまさしき至誠心の姿にて候へ。さればこそ他力の行にて起すべき中の始の至誠心とは立られて候へ。

次に深心と申は、善導和尚は、ふかく信ずる心と仰られて候なり。始の真実の心の起りぬるうへでは、深心はかならずいはざるに起るべきにて候なり。そのゆえは、本願真実なりと思ふならば、なんのゆえに疑ふころは起り候べき。一念も疑ふ心おこるならば、真実心の心はやぶれ候。又もし真実の心だにもやぶれぬものならば、露ばかりもなによりてか疑ふころは候べき。故に至誠心とはたゞ一つに取合せて離るまじきものなり。

三に廻向発願心と申は、弥陀の本願を真実なりとたのみて少も疑ふ心なき人は、来迎の雲いたらん時、観音の蓮台に乗ぜん事、かならず疑なしと思ふを、即廻向発願心とは申なり。

されば三心と申候事は、その体たゞ一なり。この三心をはなれたらん念仏は何の要にか立候べき。これによりて本願には、至心信樂

欲生我國の心にて念仏せんものゝ生ぜずば、正覺を取じと誓ひ給ひて候へば、三心具して念仏せん、^①々々往生せずば、我仏にならじと誓はせ給ひて候こゝろにて候へば、只はじめより申候やうに、弥陀の本願は、名号をとふればかならず迎へさせ給ふと、ふかくたのみて念仏するものは、^②そらに三心を具したる人にてこそ候なれ。

たゞ故上人の御房の、三心といふ事をば仰られいださずして、偏に念仏往生を疑ふべからずと仰せ候ひけるが、かへすがへす目出度事にて候なり。それがやがて三心にあたりて候なり。

(第六章) 女院

かへすがへす悦びて承り候ひぬ。ふたたび故上人の御房に逢まいらせ候やうにこそ覚え候へ。いづれの世にも忘れがたくうれしくて、ただ念仏申ながら三心具足せぬ人も候か、また念仏をだに申候へばかならず三心具する事にて候やらん。よくよく承りたく候。くはしく仰たび候べく候。

① 「そらに」は「自然に」の意

② て「私云「候」歟

(第七章) 西山

この事目出度たづね仰られて候。申ごとに念仏すれども三心具せぬ人も候。そのゆえは、我心をとゝのへすまして念仏する定^{じやう}にて、往生の御こゝろざしはとぐるにて候。仏の御名をとふれども、心もみだれしづかならぬには、いかに申すとも来迎にあづかるまじきぞなど思ひ候は、ひとへに自力の念仏にて、弥陀の本願にたがふ行にて候なり。これを三心かけた人と申て、往生すべき縁とはなるべく候。もし臨終の時は、知識にもあひ、また日頃の業にもよりて、その心の他力にもうつりて候はかならず往生すべし。故に往生不定の人とは申なり。大方はたゞ他力を思ひほどくべきにて候。念仏はすなはち他力の行にて、本願にもそむき候ひぬれば何によりてか往生はとげ候べき。この際^{あはひ}よくよく御心得ありて御念仏候べし。

(第八章) 女院

まことにいはれ候ひけり。他力の門に入なば、心も他力になるべ

① はなるゝ離

きにて候ひけるを、我も人も皆迷ひてこそ候ひけれ。

それにとりて、他力の門に入ぬればあながちに念仏すべからず。

あながちに念仏はげみいとなむものは、他力を疑ひて自力をはげむものなりと。又罪をつくらじと慎み、おそろしとおもふは、これ本願をうたがふ行者なりと申人ども候は、實にさるべきにて候やらむ。

(第九章) 西山

これも世にきこゆる事にて候へば、浅間しく歎かしき事にて候ひつるに、うれしく問ひ仰られて候なり。故上人は、知食されて候やうに、日別の念仏は七万遍を往生の業とおこたらずいとなまれ候ひき。そのをしへその跡をたずねて往生を願ん人は、身にたへ力のおよばん程は、いかにも相はげむべき事にてこそ候へ。ただし仏の名号は、百遍も千遍もみな他力をあふぐ念仏にて候へば、かならず本願には相かなひ候なり。故に一遍二遍にて候とも、自身往生せんと

おもひて候念仏は、本願にかなひ他力の益にあづかる事は叶ふまじく候。されば念仏の数の多きと少きとによりて、本願をうたがひ、うたがはざる事を定めがたく候なり。同様に日々夜々に六万遍七万遍をくり候人なりとも、自力の往生を思はん人には、本願をうたがふ念仏にて候べし。時々己が力にしたがひて百遍千遍を申候とも、他力を仰ひて念仏するには、またく本願をうたがふとは申べからず。

又罪をおそるとも、信心は自力の心にてつゝしみおそれば、これもまた本願をうたがふといふべし。他力本願をたのみて、過去の罪をも、今生の罪をも懺悔して、仏かならず迎給へと思ひて念仏せば、かならず本願にも相叶ひて、臨終の時は仏の来迎にもあづかるべきものなり。されば善導和尚の釈に、一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念々不捨者是名正定之業、順彼仏願故、若依礼誦等即名為助業、といへり。実にあしき心のおこらんにつけても、阿まこと

弥陀仏かならずこの心をうしなひてたび候へと歎き、又罪のやまずしてなを重なるやうに覺るにも、かゝる罪人たる身は、本願の力なからましかば、いかにして生死をはなれんなど、いよいよ本願の名号にたのみをかけて唱ふべし。されば一念二念までも往生は不定あるまじく候。

又罪をつゝしむべからずなど申す事は、既に一切の経論の中に、一文一句にても見および、聞およばぬ事にて候なり。道綽・善導の御釈にもつやつや仰られぬ事にて候なり。すべて聖道・浄土の教行まぢまぢなり、自力他力の心一品ならずといへども、念仏はげむべからず。又罪業つゝしむべからずといふ事は、いかにもいかにも仏法の中にはなき事と思食べく候。自力の時は、いかに行ずといへどもけしがたくやめがたき煩惱罪業なれども、弥陀の本願力によりて、名号だに唱ふればかならずはらひ除きすて候。最後に忝く弥陀観音等の手づからみづから来り迎へとらせ給ふといふ事を、実のご

とく疑ひなくなつたのみ、片時へんじもいたづらにあかしくらして、むなしく念仏せざらん事は、いかでか候べき。それにかゝる僻案どもをして、念仏も申さずして惡をのみこのむ人は、みな魔縁魔界になやまされて、臨終の時はあしくおもはざる義にて死するなり。あらおそろし、あらおそろし。これはもとより道理もなく文証もなき事にて候を、ひかされて候らひつるものこそ、まさりたるものぐるひにて候らへ。かへすがへすこの事はよくよく御案じ候べく候。

(第十章) 女院

山林にこもりて候行人、持戒淨行にて念仏して、見るにも聞にも世にありがたく羨しく候が、終りに狂はしくて死し候は、いかなる故の候やらん。世に覺束なく候。くはしく仰たび候へかし。

(第十一章) 西山

実によろづの後世者の、皆心得られぬ事とて、疑ひあひて候なり。此事よくよくことわりを案じて見候に、有様に貴き聖だては、

偏に我力をたのみて、本願の妙なる事をば空しくなしあひて候へば、弥陀の願意にたがひ候なり。まめやかに行ふ人はかならず憍慢の心十人に十人ながら起る事にて候へば、かやうの僻案どもを便として、悪魔もちかづき悩す事にて候なり。実^げにいはれでこそ覚え候へ。

このゆえに善導和尚は、憍慢の心を返す返すもいやしめ、自力と嫌はせ給ひて候なり。真実の信力だに起り候ひぬれば、かやうの誤りはいかにもいかにもあるまじく候なり。されば真実の心の中よりいできたる三業の行を、五種の正行とて、善導和尚も、目出度行とこそ所々に勧めましまし候ひけれ。この謂をよくよくおぼしめしただめ、たまたせ給ふべく候。穴賢。

女院御書 下巻尾

(再訂版下卷題言)

斯一篇曾庇 北白河女院尊請、本地十一面觀自在尊所宣說也。始自現生護念利益、終至三心証得、成弁他力妙用、逍遙自得、鸞飛戾于天、魚濯于淵、今慨此書將亡、永壽于不朽云

文政三年庚辰初春

住于南紀檀林総持講寺尾張妙弁才題

白 木